ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2008 年 8 月 2 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045 東京都北区赤羽 1-48-3-203
有限会社マイクロデザイン内
Tel 03-5249-5797 Fax 03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.318

8月行事日程

■原稿はテキストにして下記へ
kamo@sun.email.ne.jp
■**締め切り**（8 月はお休みです）
2008 年 9 月 20 日（土）
■**郵送料・年会費** 1200 円（年）
郵便振替：東京 00170-1-18290
■送料カンパお願いします。

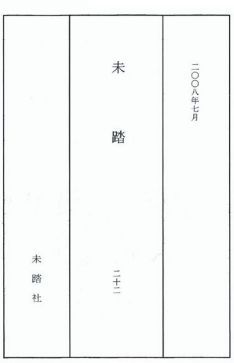
「なかまる屋」のリキュールたち（2008/07/20）

◆きょうは『旧正丸峠』（665m）行きでした。登山口は草だらけでさびれた感じでしたが、途中少しは登山客に出会いました。正丸峠コースは杉山なので暗く展望がほとんどありません。暑くなくてよかったけどね。ちょうど正午に昼食を食べ、そのまますぐ峠を下り始めたのですが、休憩所に着いたら突然眠くなったので、20分ほど昼寝をしました。わたしは登山を再開したばかりなので、前夜は興奮して眠れなかったんです。600mくらいだと、下界は相当暑かったようですが、山はちょうど心地よい気温で気持ちよく眠れました。◆正丸駅から10分くらい手前に、「なかまる屋」という茶店があり、そこで竹炭やお饅頭を買いました。お茶を入れてくれたので飲んでいたら、店の奥にずらりと果実酒が並んでいました。またたび・あんず・ガマズミ・すぐり・さくらんぼ・かりん・山葡萄・しゅうかいどう・山梨・ブルーベリー・山ほうし・ゆすらうめ・なつめ・ぼけ・ぐみなどです。わたしは『スグリ酒』を飲んでみましたが、氷の入れすぎで味は薄くてうまいとも思いませんでしたがね。そこのおばあさんの話がおもしろく、つい長居をしてしまいました。（ユ）

◆暑くなりました。こちら畑はアナグマの被害が甚大で、どの苗といわず堆肥を入れた土をほじくりだされるので弱っています。アナグマはミミズがお目当て。草を刈って積んでおいただけの堆肥はふかふかとよく肥えていて、たしかにミミズが湧くのです。仕方がないので苗のまわりをトタンなどで囲うことに。これが重労働。深夜はイノシシも徘徊しているらしく、カボチャはピンポンボール大になると喰われています。悔しい！今年は放置林のタケノコが豊作なので、そっちにいってもらいたいのですが（雅）

◆未踏社（山口和朗氏）から、未踏二十二号の寄贈がありました。ありがとうございました。（内容は、十四年間一緒に暮らした愛犬の記録で、愛犬家なら涙なしに読めない感動的な追悼記です）

永島憲一郎さん、購読料とカンパの支払いありがとうございます。
（永島さんは、都内社会福祉専門出版社 http://www.hobunsya.com/ の編集者です）



パンドラの箱　第二部

藤川博樹

第一章　終わりの始まり

とうとう無乃家常三がいた会社の資金繰りが回らなくなって、星野社長の友人で本の集配業務をしていた樽井氏との間に話がつき、常三は樽井書房に移籍することになった。樽井さんは最初星野社長に、うちの会社の社長として無乃家君を引き取りたいと言ったようだが、運送の車がひっくり返ったときに頭下げにいくことができないだろうということで、社長就任の話は無くなった。

常三は樽井氏に呼び出され「俺は三十八だ、あんたは二十七？　これからうちの会社は伸びていく。一緒にやろう」と言った。樽井社長は前にいた新読書という会社から独立して、全社協の出版物の本を代理販売し始めたばかりだった。全社協というのは、全国社会福祉協議会の略で出版部があり社会福祉関係の本を広範にわたって出版していた。もともと出版社ではなく社会福祉法人なので、売上を伸ばして利益をあげるということは考えたことも、経験もまったくなかった。営業力がなかったのである。そこで長野県湯田中の合研（全国保育団体合同研究集会）の販売業者を仕切って、本を売りまくっていた樽井さんに白羽の矢が立ったのである。

最初、全社協の営業に声をかけられたとき、樽井さんは「この人いったい何を言っているのか」夢のような話だと思ったのである。巨大な福祉関係の中央団体が本を預って売ってくれというのである。まったく商売のやり方がわからない全社協の営業担当者は必死である。渡りに舟と、樽井さんは全社協関係の本を独占販売し始めた。都道府県や市町村にはかならずある社会福祉協議会の中央組織で、その関係する分野は保育、障害者福祉、老人福祉、ボランティア、慈善団体などなど、福祉関係のあらゆる分野と連携・活動している膨大な人員を擁し、予算を使っている巨大な組織なのである。利益を追求しない非営利の民間団体なので、これまで本の売り上げを伸ばそうという発想がなかったため、出版部でどんなにいい本を出しても、あまり普及されないという欠陥があった。

樽井さんは全国各地で開催される集会や研修会に独占的に全社協の本をもちこみ販売した。まもなく、全社協出版部以外の本も預って売るようになった。販売を独占しているうえに、これから福祉社会・高齢化社会を迎えようとしてどんどん伸びていく分野だったので、たくさんの出版社が本を出し、樽井さんに預けるようになった。

常三が樽井書房に入り、杉並区の住宅街にある会社に行くと、朝九時に会社はまだ開いていなかった。会社といっても、木造二階建ての民家を借りている。すぐこじ開けられそうな簡易な扉に三桁のダイヤルロックで簡単に施錠してあるだけなのだが、番号を知らないので待っていると、まもなく前沢君が来た。彼は本の集荷配達だけの契約のバイトなので番号を知らない。前沢君は普通に就職してサラリーマンとして働いていた会社をドロップアウトして今はイラストを描いたりしてその日暮らしをしている。彼があまり語りたがらない「ちゃんとした会社」というのはどうやら建設関係らしいのだか、やめる最後の年あたりは会社に反抗して長髪にしていた。その長髪にはストレスで白髪がたくさん交じり始めていた。ところが、やめてプー太郎のフリーターになって、知り合いからイラストや漫画の仕事をもらって、仕事がある時は食べ、無いときは人にたかるというその日暮らしを始めてから、白髪が一本も無くなったという。

そのやや無責任男の前沢君ももともと理系の大学出なので、三桁なのだから０００から９９９まで一〇〇〇回せば、からなず開くと論理的なことを言う。それで二人で鍵にかがみ込んで０から回し始めた。

そのうちモッ君の奥さんのマッちゃんがきた。番号は６５６だという。大きな声でしゃべっていると、ひょっこり隣の家のおじさんが出てきてどこやらへ出かけた。常三が「いまの番号聞

かれたよ」というと、マッちゃんが「しまった、消さなければ」などとまじめなのか冗談なのかわからない顔で言う。

翌日も京王井の頭線の久我山で降りて、九時過ぎに会社への道を歩いていると、道で社長にぱったりとあった。そこで常三が、会社は何時に開くのですかと聞くと、樽井社長は「うちの会社何時からなんだろう」ちゃんと決めなきゃなと頼りない回答。常三が二日通って分かったことは、どうやら会社にはみんな十時ごろに集まりはじめるらしいということだった。

もともと樽井社長とモッ君と二人で始めた会社で、二人で組んだきっかけというのも、そもそも湯田中の集会で、別々の出版社から販売員として来ていて知り合って、業者の早朝野球などで活躍していたのだが、偶然樽井社長が全社協の本を販売することにより、仕事が大きくなりそうな予感があり、二人で組んでやることになったのだ。その「予感」通り、どんどん本の販売量は増え忙しくなったのだが、なにしろ「会社」という形の体をなしていなかったので、財産はワゴン車一台だけ、本の在庫は知り合いの「ささら書房」の軒先を無料で借りて置かせてもらっていた。ささら書房は保育の本を出して保育の合同保問研で本を売りまくっていた。真保社長に言わせると、「あの頃、樽井さんとおれは肩で風切って歩いていた」のである。しかし、子どもの数が減り始め、時代は高度成長社会から高齢社会へ、保育から老人福祉・介護福祉のの時代へと舵を切り始めていた。それを、湯田中で野球をしていた本の販売担当の人たちは誰一人気づいていなかった。樽井社長とモッ君は、全社協の本を売り始めて初めて身に沁みて感じさせられたのである。保育も、老人も障害者も介護もボランティアも、あるゆる分野の研修集会や定期大会に行くのだが、二人には本の売れ方ではっきり時代の求めているものが分かったのである。当時まだ老人福祉関係の本は数えるほどしかなかったのだが、テーブルをつなぎ合わせてシーツを敷いた簡素な台に山積みに積み上げていた「特別養護老人ホームの処遇」などという本が、あっと言う間に売り切れたのである。

会社を共同で始めたばかりなのに仕事が慌ただしくなってしまって、本は「ささら書房」の軒先に無造作に積み上げられていた。集会の前日になると、適当に段ボール箱をみつくろって出かけていく。さすがにモッ君が「樽井さん、そろそろ会社（建物）持とうよ」と言った。しかし、一匹狼素浪人を気取っていた樽井社長は、長髪猫背にくわえタバコを横向きにふかし、宵越しの金は持たない式の気取りを捨てることができなかった。ややくざふうな悪者気取りで、目つき鋭く、集会で売った代金を飲んでしまって赤字は増えるばかりであった。しかしささら書房の軒先に積み上げられた本は、下の方に何があるのかもわからず、集会でも売れる本がなかったり、売れない本ばかりワゴン車の荷台に残っていたという事態が続き、さすがに樽井社長もどこやらから会社の建物を調達してきた。それが常三が通い始めた樽井書房である。

会社は木造二階建て民家で、一階を入ると四畳半ほどの石畳の土間があり、その向こうに六畳の和室、半畳の台所がついていた。台所の左の階段を上がると、二階は六畳と四畳半の和室二つだった。その部屋の中に所狭しと本が積み上げてある。トイレの中にまで本が積み上がり、一部は崩れていた。百社近くの本を預っている。集会や研修会があるたびに、その山の中から山勘で本を選び出してワゴンに積んで売りにいくのである。集会が終わったあとの版元・出版社への精算も、在庫を正確に数えることができないので、ヤマカンだった。ひどい場合には、伝票をなくしたのか急いでいてもらうのを忘れたのか何冊預ったかの記録がわからず、もっとひどい場合には預けた出版社の担当営業さえ何冊預けたかの記録を取っていず、「十万円で手を打とう」などとやっている。モッ君にしても十万以上は売れた、絶対もうかってるよなどと黒目勝ちの大きな目を剥いて確信あり気だが、回りの人間は誰も信じていない。その出版社はしばらくして倒産した。

モッ君が、樽井さんそろそろ「会社の建物持とうよ」と提案してやっといわゆる「会社」が実現したのである。建物がなくても会社は会社なのだが、場所がなければやはり登記はできない。会社は常三が入る前年に登記したばかりだった。

アルバイトに来ていた、石澤君はまだ学生だったが、十一時ごろやってきて、帳簿の入金チェックなどをやって

いる。「隣のおじさんを消さなければ」と物騒な発言を連発するマッちゃんは、茶髪で長髪のカーリーヘアーで、初見で忘れられない印象を与える情熱家。時給のアルバイトなので十時にやってきて経理をやっている。「石澤君、誰か言ってやらないと、今日十一時に来たわよ」とマッちゃん。マッちゃんも、もともと会社があまりにも忙しくてゴタゴタしてきたので、急遽呼び出されたモッ君のパートナーである。登記して「会社」になったら、経理をつけなきゃいかんということをどこかで聞きおよび、あわてて駆り出されたという。なりゆきで人を雇っているので、誰が正社員なのか、バイトなのか実ははっきりしていないのだ。

石澤君はなんとなく十一時ごろ来て仕事を始め、五時ごろなんとなく帰って行った。けっきょく、誰も石澤君には直接言ってやらなかった。石澤君はある日樽井社長に集会に連れて行かれ、初めての経験なのに販売を一人でやらされた。集会のときお客さんは大量の専門書を買い、社ではその発送も請け負っていた。住所をメモした紙を書いてもらって本の束にはさんでおく。この作業がいいかげんで、ワゴン車が高速道路で揺られ、会社に帰って来るまでに本はごった返しにひっくり返って何がなんだかわからなくなってしまっていた。集会が終わったあと「頼んだ本が届かない」というクレームの電話が何日間も鳴り続けた。「何百万円も損した」とモッ君は大きな黒目を見張って真剣な顔つきで断言する。そんなこともあって、こちらから電話して石澤君にバイトを頼むこともなくなり、石澤君は電話が来ないと下宿でずっと寝ているので、それきり来なくなってしまった。

場当たり的に人が集まってきた会社なので、不思議なことに始業時間を一回も決めたことがなかったのである。働きたくなったら会社に行き、能力に応じて働き、必要に応じてもらうという何かの理想社会の奇跡的・局地的実現のようでもあるが、会社の赤字だけは増え続けていた。

〔エッセイ〕小さくて大きな人

内田幸彦

佐山先生は丹波篠山の出身で、十六の時、代議士を志し国を出た。ポッと街に出た少年にすぐに希望の代議士の伝手（つて）もなく、取り敢えず歯科医の見習いに入ったのが人生の岐路となった。心ならずも、歯科医で一生を通す結果になったと言う。

先生と私との交際は古く、四、五才だった私は治療に行って、物差しを刀に見立てて、先生に切り付け、治療に応じなかったと、先生は懐かしそうに一つ話にする仲である。

その後、生活に追われご無沙汰をしていたが、四十代になって虫歯が出来、久し振りに治療に行った。

「どうだ、仕事は上手く行ってるか？」

「仕事は今一つと言う所で、その補いを株式でやってます。」

「儲かるか？」

「ええまあ、不足分位は補えてますが。」

「そうか、儂もやりたいのだが、その暇がなくてなあ。どうだ一緒にやってくれんか？」

「ええ。手間は一緒ですから、私は構いません。でも、私は年を取り、苦労して人間も変わってるかも知れませんよ。子供の頃と違って……。」

「いや、儂はお前をよく知っている。」

「そうでしょうか？　ちょっと不用心だと思いますがねえ、三十年以上も経てば人間も変わりますよ。」

そんなやり取りがあって、出資は同額、損得も折半という事で株式売買を始めた。

最初の半年位は順調に利益を上げていたが、他人に聞いた空売りを、何事も経験だと、やってみた。空売りというのは信用取引で、一つの銘柄を高値で仮に売っておく。仮に千円売っておいて八百円に下がったとすれば、手数料を引いて百七十六円の儲けになる。株価は上るより下るスピードが早いのを狙ったのが、空売りである。

空売りは六ヶ月目の期日には損でも、得でも精算せねばならない規則があり、信用買いとは違いがある。玄人筋でも空売りする人は、十人に一人もない危険な行為とされている。

銘柄はグリコだったが、運悪く値上がりが続いた。私は売り上がった、それも倍数の株数を。最初が千株なら、次は二千株売り上がる。次は六千株というように、倍数を売り上がらないと平均単価が下がらないからだ。二万五千株まで売り上がった時、明らかに敗北を悟った。負けは一時も早く見切らないと、工場や家まで無くなってしまう。

私は先生に叱られるのを覚悟で、恐る恐る損切りを申し出た。私は全資金を失い、これ以上やると家や工場まで無くなるから、これで止めさせて欲しい、と。先生の損金は、他の方法で死ぬまでに必ず払います、と私は言った。

先生は腕組みをして「ウーン」と考え込んだ。私は叱責を覚悟の上で、先生の怒りの言葉を待った。しばらくしておもむろに、

「そうか、それは済まなかった。儂は何もせずに、君にばかり苦労を掛けてなあ。」

私は耳を疑った。怒鳴られるか、弁償しろと迫られるに違いないと思っていた。それがなんと意外な慰めの言葉だった。私は驚きと感動に呆気に取られ、言葉も出なかった。合計千三百万円、一人分が六百五十万円の損をして、こんな温かい言葉が掛けられるものだろうか？　特に、先生のような苦学した苦労人は、お金に厳しいものである。先生は更に言葉を続けた。

「取り戻そう、いや二人が儲かるまでやろう。資金は全部儂が出す。」

「でも、私は無一文です。」

「心配するな、金のことはいいから勝つまでやるんだ。」

フト、私は思った。〝自分の事はいいとしても、この人だけは放って置けない〟と決心した。

「先生、そこまでおっしやるなら、もう一度やってみます。でも、これだけは御承知下さい。勿論、全神経を挙げて努力はしますが、取り戻すという保証は出来ませんが、構いませんか」

「そりや当然だ。相場だから、勝つも負けるも時の運だ。それ位儂だって判っている。やってくれ、儲けて二人が笑うまでだ。頑張ろう。金は何時でも取りに来い。」

私は先生の腹の太さに改めて先生を見直し、敬服の念で一杯になった。

老婆心ながら、信用取引の説明をすると、信用買いは六ヶ月目に、買い値よりも下がっていれば、買い値の現金を払えば損をせずに現物化出来る。これを現引きと言う。信用売りは現引きは出来ない。六ヶ月目には必ず精算をせねばならない。信用買いと信用売りの違いで、玄人でも十人に一人もやらないと言う。

再開したが、現引きが出来る、見込みのない株の見切り損が出る、その度に八十万円、少なくても二、三十万と毎月、二度や三度貰いに行かない月はなかった。でも、先生は何時も笑顔で「今日は幾ら要るんだ？」とまるで孫に小遣いでもあげるような温かさだった。

何故か、銀行取引をしなかった先生は、押し入れの奥の金庫に札束を積んであった。それに奥様も子供の頃からの馴染みで親しく、私が、月に二度も、三度も何をしに来るのかは知っているはずなのに、何時もニコニコして、お茶とお菓子を出してくれる。普通の奥さん達はこうは行かない。大抵の人は不機嫌な顔をするものだ。夫婦揃って良くできた人達で、心服せざるを得なかった。これが世間並みの奥さんだったら、私は際々お金を貰いに行けなかったに違いない。

お金というのは便利で心を豊かにし、誰もが執着のない者はない貴重なものだが、それだけに誰もが微妙な感情を持っている。お金に執着しすぎると、金に汚い、ケチん坊と言われるし、かといって程々に考えるとお金なんて貯まりっこない、難しいのがお金である。

私も食い詰めて小さな商売を初めて三十余年、厭と言う程お金の生態を経験してきた。お金の有り難さ、怖さ、汚さ、言い換えてみれば欲の権化がお金である。学識も教養もある高級官吏でさえ、汚職の罠にはまる。いかにお金が貴重で、怖いかは想像に難くない。

でも先生は、際限のないお金を笑って出してくれた。先生のような出来た人は何千人に一人、或いは何万人に一人かもしれない。先生は身長百五十センチ前後の痩せた小男だが、その肚の大きいこと先生に比べる人は後にも先にもなかった。

私も三十余年、商売上、上は社長から下は労働者まで各層の人達と接触があったが、先生のようなお金に淡泊で信念の人は、只一人だけだった。先生を放って置けないと思ったのはあの言葉だった。

「済まんのう、儂は何もせず君にばかりに苦労を掛けて……」という言葉が先生が逝かれた今も耳に残っている。

夏の海

中井 豊

また暑い夏に入った。かつては水中眼鏡を着け、腰に網袋を結わえて、ヤスを片手に磯に潜り、ガンガラ、サザエ、トコブシ、アワビなどの貝を採ったり、ベラ、ガシラ、タカノハダイ、メバルなどの魚を突いたりするのが実益を兼ねた夏の楽しみだった。

初めて海で貝を採ったのは、和歌山県湯浅町に住んでいた時だ。朝、父と父の同僚二、三人に随いて列車でひと駅の由良へ行き、バスに乗って白崎海岸へ出た。さわやかな午前の日射しを受けながら大人達は海に潜って貝を採った。小学四、五年生だった私はまだ泳げず、岩づたいに少しだけ潜ってガンガラを採ることしか出来なかった。父はサザエを幾つか採った。飽きてきたので、高い岩の上で弁当を勝手に食べた。この行儀の悪さが父に恥ずかしい思いをさせたらしく、後になって母から注意された。余程のことがない限り、父が子供を叱るということはなく、大抵は母への苦情を通じて伝えるという形になった。教育は母の役目ということだろうが、言葉を尽くして説明することが苦手だったような気がする。それが今の私にもあり、「遺伝」であろうと思われる。

子供の頃の私は野球などのスポーツには熱心で得意でもあったが、泳ぎは苦手だった。学校では夏休みに入る前、必ず「海に入る際の注意」がある。溺れないようにすること、泳いだ後は目や耳を洗浄することなどの注意だったと思う。印象に残っているのは、晒しの六尺褌を解いて長くすると鱶（ふか）よけになるらしいといった話だ。小学校の先生の話すことに、泳げる者同士は頷き合っていた。兄弟のいる同級生には泳げる者が多いようだった。現在のようにスイミング・スクールで泳ぎを覚える時代ではなかったのである。

浜で溺れかかったことがある。一度だけ家族で歩いて近くの海に行った折りのことだ。父は沖へ向かって泳ぎ去り、泳げない母は普段着で日傘をさして浜辺に坐っていた。私は両耳を押さえて海に浮かんで遊んでいた。どうしたはずみか、足が立たなくなり、慌てて両手両足をバタバタやったが、周囲の海水に気泡が空しく湧き上がるだけだった。水を飲みながら《死ぬかも知れぬ》と思っていたその時、誰かに引き上げられた。沖から父が見ていて泳ぎ着き、助けたのだった。直ぐに陸に上がり、「水を吐け」と言われたが、意気消沈して吐けなかった。実は父自身も子供の頃、池で泳いでいて溺れかけ、従兄弟に助けられたと後年になって聞いた。泳ぐ子供からは決して目を離してはならないのである。

泳げるようになったのは父の実家へ泊まりに行き、泳げる従兄弟たちと一緒に池に入ったり、中学校の同級生と川で泳いだりしてからだ。要するに、見よう見まねで覚えるしかないので、「畳の上の水練」では泳げるようにはならない。

中学校の同級生やその兄弟と一緒に泳いだのは三重県熊野市の井戸川だった。前に小学校があって、川の両側がコンクリートでプール・サイドのように造られていた。プールが学校にあるのは高校からだった。川べりで鬼ごっこをしながら道路から川に飛び込む。飛び込んで目を開けると水中の目の前に大きな岩が迫っていたという怖いこともあった。山にしろ海にしろ、自然の中で遊ぶことは危険を伴うことである。しかし、その中でこそ多くのことを真剣に学び、自然や仲間とのコミュニケーションの方法を身に着けることができる。だから、子供の頃の遊びが人生の何よりの糧となるのだ。

和歌山県新宮市から熊野市にかけての海岸は「七里御浜」といい、玉砂利の浜が延々と伸びる。砂利の美しいものは磨かれて「御浜小石」と呼ばれる。外洋の海水が荒々しく打ち寄せ、一気に深くなっていて、全体が水泳禁止なのだが、泳げるようになってからは、この海でも泳いだ。荒い波が来ると、引く波に押し戻され、なかなか陸に上がれない。タイミングを誤ると次の波に巻き込まれ

て身体が一回転する。中学校の先生も水泳禁止であることを確認した序でに、台風の時に泳ぎ、戻るに戻れなくなって、波が治まるまで仰向けに浮いていた話をされた。それにしても、青い夏空の下、太平洋の海水はどこまでも鋼色に澄んでいて冷たく清々しかった。この海と、太平洋から眺める濃い緑に覆われた南紀の山々は忘れられるものではない。

尾鷲中学校へ転校してからは川で泳いだ記憶しかない。尾鷲の海辺は遠洋漁業の船も来るらしく、立派な漁港になっていて泳げなかったからだ。プールで競泳した記憶があるのだが、高校のプールを借りて催された校内大会だったかも知れない。同級の漁師の息子はさすがに速く、背泳でしか太刀打ちできなかった。

和歌山県古座町（現在の串本町）へ引っ越すと、家の近くが田原海岸だった。この海岸は海水浴に相応しい綺麗な白砂の浜になっていて、湾の入口は沖に向かって伸びる磯である。やはり漁師の息子が同級にいて、浜で度々泳ぐ私に親しみを感じていたようだった。一緒に磯に潜り、岩の上で甲羅干ししながら彼と雑談するのは楽しかった。彼が仕留めた三〇センチもある魚を二匹もらって帰った。何でも、耳栓をして一〇メートルほど潜って魚を追いかけると、魚は逃げ疲れて海底の岩の間に隠れる。そこを突くのだと言っていた。私が潜れたのはせいぜい三メートルくらいではなかったかと思う。家から海岸までは歩いて一〇分もかからなかったから、銭湯にでも行く気分で、タオルを片手に海水パンツ姿で毎日のように泳ぎに出掛けた。

三十歳を過ぎる時分まで山に親しむことのなかった私は、それまで夏は海で遊ぶことしか知らなかったといえる。真夏に入って、朝から熊蝉がシャンシャンと喧しく、真っ青な空を背に入道雲が強烈な太陽光線を反射して輝くようになると、海で遊んだ記憶が甦る。久し振りに、この夏は果てしなく広がる南紀の太平洋を見に行こうかなどと思うのである。

沖縄の思い出 ⑬

多村 喜木子

さきはら荘は年末に近づくにつれ客が増え、それまで悠々と一人部屋を使っていた客は荷物をまとめて部屋を移動させられ、少数派の夫婦やグループを除いてほとんどの客が男性と女性に分かれて相部屋となった。ダイビングショップにあらかじめ聞かされていたのか、常連だから知っていたのか、客と同世代のキレイな淳子さんに頼まれたからなのか理由はわからないが、誰一人文句を言う人がいないどころか返って客同士の連帯感が高まり、まるで宿全体が男子校の修学旅行か寮のような状態になっていた。

この時の淳子さんと私は、客数と比例して増え続ける仕事と連日の宴会で、少しでも油断をすると瞬間的に熟睡に落ちてしまうほど疲れが溜まっていた。二人で朝目覚める度に「今夜こそ早く寝るぞ！」と強く誓い合い、次に眠りにつける時までの辛抱とばかりに体中の力を振り絞って部屋を出た。それでも掃除をしながら部屋のゴミを集めに戻った時など二人ともが示し合わせることもなく一時間も眠りこけてしまうこともあった。とにかく眠くて眠くて昼でも夜でも思いっきり寝たいとそればかり考えていたが、後から考えるとあれほど求めていた睡眠など一時的な欲求で、それよりももっと有意義な時間を過ごしていたのだとわかった。

大晦日にも恒例の宴会が始まり泡盛を飲みながら日付が変わる瞬間に大きな声でカウントダウンをして深夜遅くまで盛り上がった。その異様にノリの良い雰囲気の中、誰からともなく早朝にもう一度集まって初日の出を見に行こう！　という提案が出た。私は与那国島に来て以来、何かにつけて日本最西端で経験するということに置きかえるクセがついて

いたため、日本中の人が見た日の出を一番最後に見るのか……いまいちインパクトに欠けるなぁ。それだったら一番最後に見る夕日の方が格好つくけどな。と思いながらも睡眠不足や翌朝の仕事のことなどは考えもせずに一緒に盛り上がっていた。

一旦解散と決まれば先に客を返し、淳子さんと私はテーブルの上を手早く片付けて食堂の電気を消してから部屋へ戻った。二人になれば先ほど一緒にいた客の噂話などもしたかったが、数時間後にはまた集合なのだ、話もそこそこに布団へ突っ伏して眠った。

まだ暗い朝、というよりも夜の終わり頃、体中がしびれるような感覚だったが元旦という非日常的な気分のせいか意外とすんなり起きられるものだった。淳子さんと「本当にみんな来てますかね～」などと言いながら食堂へ向かうと、暗く静まり返ったところに一人また一人と約束した全員が欠けることなく現れて、思わず顔を見合わせてニンヤリと笑い合った。ここでゆっくりしている暇はない、急いで東崎へ出発だ！

さきはら号だけでは全員乗れそうにないのでおばあのトラックを借りることにした。この時に撮った写真が今でも脳裏に焼きついているのだが、それによると豊田さんと客たちがトラックの荷台に乗り、私は運良くさきはら号の助手席に乗れたらしい。フラッシュで白く光った写真の中で髪や服を風になびかせながら寒そうにこちらに手を振るみんなの姿が写っている。

東崎へ着くと駐車場には先に何台か車が停まっていて、島の人や観光客が初日の出を待っている。私たちは今頃東京辺りかな～などと言いながら、各自が持参したカメラで集合写真を撮りながら日本列島を横断するように昇ってくる太陽を想像しながら待つ。すると、いつの間にやらみんなの顔が見やすくなり空が明るくなっていることに気付いた時、すでに初日の出はぼんやりと境目もわからないまま昇った後だった。残念ながら絵に描いたような真ん丸の初日の出ではなかったが、こうしてみんなで見に行ったことが楽しくて忘れられない経験がまた一つ増えた。

宿に帰るといつもの朝食の準備には少し早かったが、この日ばかりはお正月らしいことをしなさいとおばあが珍しく厨房へ来て指示を出し、私たちに買い置きの煮豆やかまぼこを重箱に詰めさせ、普段はおばあが生活している建物の一番座と二番座と呼ばれる座敷を開放し、その重箱をバイキングのように並べて朝食を食べに来た客に勧めてた。しかし、その煮豆は業務用の袋から出しただけの緑やら白やらの甘すぎるニチャニチャした代物で、とても男性客に受けるとは思われず、雰囲気だけは喜ばれたものの案の定大量に余ることとなり、その後毎食、私たちの食卓（と言っても厨房の台だが）に出しては減らずまた冷蔵庫に戻すという日々が続いた。

正月三が日が過ぎると客もパラパラと帰りだし、私の冬休みも残りわずかとなっていた。その時に滞在している客の中には私が帰る日より先まで予約している人もいて、見送る側から見送られる側になった時、《さきはら荘の人》だった気持ちがまた最初の仮住まいのような感覚に戻っていくのを感じた。そして姉や友達のように親しくしてきた淳子さんがお給料を精算してくれた。その時も淳子さんが少し遠い存在になったような気がした。そのお金を持って、さきはらスーパーと同じ建物内にあるＪＴＡの旅行会社に飛行機のチケットを買いに行った。旅行会社では久々にきちんとした制服を着た人がチケット用の大きなパソコンをカタカタと鳴らしているのが妙に都会的に見えて、たった二十日ほどいただけなのにこんなちょっとしたことが新鮮に思えるほど与那国の暮らしに順応していたんだな～と思った。

帰る飛行機も決まり、両親に電話をして伊丹空港に迎えにきてもらう手筈も整え、だんだんと寂しくなってきた頃、「またおいでね～」と冗談めかして言ってくれる淳子さんのいつもは感情を出さない人が私の想像以上に寂しそうにしている様子を感じ取って、「ほんまにまた来ていいですか？」と私も冗談めかして言い返すようになり、とうとう最後の日には「絶対また来ます！」と笑顔で言っていた。

（つづく）

ヤマンバ修行⑧

蒲原ユミ子

「ふむ、腰を打ってるな。まあ当然だが」
　ヤマンバは里枝に背中を向けた。
「家で応急処置をするから、おれにおぶされ」
　里枝はそうっと動き、七実も手伝ってくれたのでヤマンバの背におぶさることができた。ヤマンバはすっくと立ち玄関にゆっくり向かった。
　七実は、（ああ、腰くらいでよかった！）と心から思った。そして、（下がやわらかい地面だったからほんとうによかった。それにしても、ヤマンバは力持ち。あんなに大きい里枝ちゃんを軽々しょって…）と安心するやら感心するやらしてヤマンバの後につづいた。
　家に入り、ヤマンバは里枝を茶の間にそっと下ろすなり、七実に命令した。
「腰をしっぷするよ。土間に里芋が袋に入っているから、十こくらい洗って皮をむいておくれ」
「はい」
　七実は救急車をよばないでいいのかなと思ったが、ヤマンバの家にはケータイはもちろん電話すらないようだ。（まあ、里枝ちゃんは命にべつじょうないようだからいいか…）と思いながら、土間に急いだ。ヤマンバはたんすから「さらし」とか「三角巾」などを取り出している。
　七実はすぐ里芋を見つけ手づかみで持って台所へ行った。流しで土を洗い落とし、包丁を見つけ皮をむき始めた。七実はこのごろかんたんな味噌汁くらいは作るようになったが、皮むきはまだ得意ではない。一つむくのにももたもたしていると、ヤマンバがやってきて残りをあっという間にむき終えた。そして、もう一度里芋を洗ってすり鉢にすりおろしながら七実に言った。
「畑の大根の畝のとなりに、ショウガが生えているから一株ぬいて、外流しで洗ってきておくれ」
「はい！」
　ショウガはすぐ見つかった。葉や茎はもう茶色に枯れかけている。その根元をほると、黄土色のしっかりした地下茎が出てきた。七実はそれを素手で土ごとつかんでぐいと持ち上げた。太い根っこが何本もついていてすごく滋養のありそうなショウガだ。
　七実は急いでそれを外流しで土を洗い流してヤマンバのところへ持っていった。ヤマンバはそれもゴリゴリおろした。終わるなり、小麦粉もすり鉢に入れて混ぜてこねた。ほんのり山吹色の里芋パスタができあがった。うまそうでもある。
　それを里枝のところへ持っていき、さらしにたっぷりぬり始めた。
「こいつは打ち身によくきくんじゃ」
「ひえ～」
　里枝は顔をしかめている。七実は里枝に聞いた。
「こし、すごくいたい？」
　里枝は笑い顔をつくって言った。
「ちょっとね」
　七実には里枝がやせがまんしているように見えた。
「頭はほんとうになんともないの？」
　里枝は首をコキコキいわせてまわした。
「ちょっと首すじがいたいかな」
「吐きたくないかい？」
　ヤマンバが聞いた。里枝は首をふった。（つづく）

【掌編エッセイ】藤井規雄

面接

『……？』
「……」
『……？』
「……」
『……？』
「そのようなことは、みな履歴書に書いてあります」
『わかっとる。帰れ』

野良猫は……

【犬や猫などの適正な飼育・管理を】
「私たちにできること（中略）ペットを衝動買いしない」
「終生飼えるか家族で十分に検討する」
「犬の行動心理についての知識を持つ」
「野良猫の避妊手術をせずに餌だけやっていると、野良猫はネズミ算的に増えてしまい、ついには近隣住民とのトラブルに発展したりします」
なお、私の住んでいる町には「総務部お困りです課」があります。
ネズミ算？
ヤフー！　の場合
「ネズミ算」検索
「ねずみ算―Wikipedia」をクリック。
もう一度、言わせて貰お……
野良猫はネズミ算的に増えて……

混沌市凡日録　３９

ブッダ・コード

蒲原直樹

　渾沌市北部「混沌の森」の群玉大学医学部遺伝子研究室はＩＴバブルの崩壊後は予算が削られ、夜ともなれば施設内の明かりは最低限のものまで消され、真っ暗に近くなる。午後十一時、かろうじて燈されている一部屋は応接室で、そこにまだ若い男女が向かい合って座っていた。

　一人は京都大学医学部出身の秀才で、博士号取得とともにこの春から副研究室長に昇格した倉持幻太郎だ。彼は昇格したにもかかわらず院生時代と同じスキンヘッドに無精ひげを生やし、Ｔシャツの上に汚れた白衣を無造作にはおっている。向かいに座っているのは幻太郎の先輩で、医学ジャーナリストの肩書きを持つ鈴村薫だった。彼女はショートヘアに男物の背広を着ていて、ちょっと見には女性に見えなかった。

「それで、これがサンプルですか？」

「そう、仏舎利です」

　幻太郎がガラス瓶の中に入った微量の粉のようなものを持ち上げて眺めた。

「舎利ちゅうたら骨のことやけど、これは骨のカスみたいなもんですな」

「それを手に入れるだけでも大ごとやったんやで、それともカスやったらあかんか？」

「そら、分析してみんことにはなんとも言えまへんが……」

　首をかしげた後、一呼吸おいて幻太郎は言った。

「そもそも、これ、ほんまもんですか？」

　幻太郎の問いに応えて鈴村薫は詳しい経過を話した。『メサイア・コード』（マイクル・コーディ　ハヤカワ文庫）を読んだ雑誌記者が「キリストの遺伝子解析ができるなら、仏陀でやってもいいだろう」とこの企画を提案し、彼女が監修役に推されたこと、彼女が宗教学者を回って裏づけ調査を行ったこと。その結果明らかになったのは、

◆インド国立博物館仏舎利塔の中のものならば本物確実。しかしこれは不可能ではないものの予算的に入手不能。それで国内にしぼると、

◆高野山南院仏舎利塔の中のものこれがほぼ本物と信じられるという結論だった。

「スリランカのシロガマ・ヴィマーラ大僧正が南院で修行しはったご縁で、昭和六三年に当時のジャワルダナヤ大統領から贈られたものやから、ほぼ本物間違いないんやて。歴史的に本家のインドは大乱が続いて仏舎利塔も破壊されてしもうたけど、スリランカのものは保存状態がええそうや。もっとも最近はスリランカも物騒やけどな」

「……それで、高野山に問い合わせたけど埒が明かん。最後には文化庁宗教法人審議会委員の大岩先生に口をきいてもろうたの。いや、私は面識ないねんけどな、先輩から先輩へ京大人脈をたどってやっとたどり着いたんよ。その結果、なんとかこれが手に入ったゆうわけや」

「そらほんまに大ごとでしたなあ」

　幻太郎はあらためてガラス瓶と薫の顔を交互に眺めるのだった。

「これで解析がうまくいかなんだら、どんな苦情がくるかわかりまへんなあ」

「心配ないって、ゲンちゃんの腕やったら成功間違いないわ」

　鈴村薫はにこやかに笑った。

「ゲンちゃんの評判は京都まで聞こえてるで、世界史を塗り替える大天才が日本にいるとしたら倉持幻太郎だろうって。……それに研究するならキリストよりは仏陀のほうがずっと有利なんよ」

「それはまたなんでですか？」幻太郎が怪訝そうに尋ねた。

「仏陀は実在した人物やてはっきりしてるけど、イエスが存在したゆう証拠はどこにもないからや」

「ほう……」

「それだけやない、二つの宗教の哲学的な内容や二人が起こした奇跡のエピソードを比較検討すると、キリスト教というのは仏教のローマ的な読み替えやないか、という解釈がなりたつのや。つまり救世主はインドの王族ゴータマ・シッタルダ太子や、て言うよりは、旧約聖書で予言されたナザレの大工の息子や、て言うほうが都合がよかったということよ。……早い話が仏陀の遺伝子は実在するけど、イエスのは最初から怪しいというこっちゃ」

「ああ、そういうことですか……」

幻太郎は半分納得しかねる様子でつぶやいた。
「でもそれやとやっぱり、実験結果が厳密に検証されるゆうことですわな、いいかげんな調査したら世界中から非難されるかもしれまへんな」
それは確かにその通りなので鈴村薫は深く頷いた。

「ぼくんち、禅宗の寺なんですよ」
助手の柳原英道が言った。
「沼田のつぶれかけたボロ寺なんですけどね、それでも親父は坊主で宗教心は持ってるわけです。その子どもがこんなことやっていいんかな、と思いますね」
太った柳原はだらだら汗を流しながら仏舎利を溶液に混ぜ、ミキサーにかけている。これをナショナルの小型遺伝子解析装置に入れて遺伝子の塩基配列を読み取ろうというわけだ。幻太郎はシニックに言った。
「坊さんからしたら、色即是空を唱えている仏さんの骨を解析するなんてアホのすることやろな」
「肉体は高次元のものの影である、という考え方をするわけですから、仏舎利を崇めるという行為は仏さんの思想に真っ向から反していると思います。しかしまあ、一方で多くの人の宗教心の拠り所でもあるわけですから、複雑ですね」
「宗教心なんかカケラもないこっちゃにしても、あまり寝覚めはよくないわな。ちゃっちゃとすませてビールでも飲もうや、ギャラは高いからヒデにもボーナス出したるで」
そうした会話の最中にも分析は進み、パソコンのモニターに結果が表示され始めた。
「こりゃ、駄目ですね……あまりにも細切れです」
モニターを確認しながら柳原が言った。
「サンプルが骨髄細胞ならともかく、骨片を削ったものだからＤＮＡが断片化しています。ここから遺伝子を再生するのは無理ですよ」
「そうか？」倉持幻太郎は横からモニターを覗き込み、しばらくなにやら考えていた。
「ようし……だいたい分かった。『フランケン倉持』のあだ名が伊達やない、ゆうところを見せたるわ！」
幻太郎はサンプルを解析装置から引き出すといろんな添加剤や溶剤をそれに加え、遠心分離機や電気泳導装置にかけた。それを何度か繰り返してからもう一度解析装置にかけると、驚いたことにモニターには見事な塩基ループが再現されていた。
「すごい！……こりゃあセロ・タカヤマ並みのマジックですね、さすが倉さん！」
柳原の絶賛を浴びながら、幻太郎はくすぐったそうな笑みを浮かべていた。

一年近く季節が移り、初夏の日差しが「渾沌の森」にかかる頃、群玉大学医学部遺伝子研究室応接室に同じ二人が対面していた。
「その節はお世話さまでした」
「いえいえ、たいしたお役にもたてず、恐縮です」
「役に立ったから、本も売れたんやないの」
医学ジャーナリスト鈴村薫は上機嫌だった。彼女の編纂した『月刊レムリア別冊・仏陀の遺伝子をあばく！』はベストセラーになったからだ。センセーショナルなタイトルの割にその中身は「二五〇〇年前のコーカソイド男性、八十歳くらい、胃癌または腸閉塞で死亡」という当たり前の結果しか出なかったのだが、事実の持つ衝撃度は大きかったのだ。
「ゲンちゃん、これでまた名前が売れたねえ、マスコミの取材も来てるんちゃう？」
「ま、ぼちぼちですわ」
「仏陀のクローンを作ろうゆう話はないの？」
「それは不可能ですわ、遺伝子技術界の倫理規定で出来ません」
否定しながら幻太郎は怪しい笑顔を見せた。
「それはそうと、結婚したんやて？」
「はあ……」幻太郎は頭をかいた。
『おめでた結婚』やて聞いたよ。もう産まれたの？」
「ええ、先々週のことですわ」
「かわいいやろね、ゲンちゃんの子どもやったら……写真ないの？」
言われて幻太郎は携帯の液晶画面を開いて見せた。それを見た薫はギョッとした。生後二週間の赤ん坊にしてはあまりに彫りの深い大人顔であり、しかもチリチリの天然パーマ、眉間には白毫（びゃくごう）らしい光があった。
「ゲンちゃん、この子……」
薫が絶句すると、幻太郎はのうのうとして言った。
「世界史を塗り替える大天才ゆうのは、ワシやのうてこの子かもしれませんなァ？」

わたしの大学生活（14）

ふじみ ちょ

2度目のジョイントコンサートが終了した。例によって合唱の話である。他大学の合唱団と共演するこの演奏会は、前期の活動の集大成といえる。そんな大舞台が先日ようやく終わった。

2年目の余裕というか油断というか、今年のわたしは去年よりはどっしりと構えられていたのではないかと思う。団全体も本番1ヶ月ほど前からいい盛り上がりを見せていた。1歩ずつ着実に当日に向けて準備を進めていた運営の先輩方、そして初めてのことばかりだったにもかかわらず、周りの雰囲気をしっかりと見て日々行動できていた、有能で前途明るい後輩たちもそこにはいた。

大舞台を終えて思うことは兎にも角にも「やっぱり合唱っていい♪」の一言。去年のジョイントコンサートでも感じたことだが、歌い手と聴き手の心が通い合ったと思える瞬間は鳥肌が立つ。その一瞬のために音楽をしているんだという思いが沸々と湧きあがるのだ。

今回はわたしの所属している団の単独ステージで、初のソロをいただいた。歌ではなく掛け声なのだが、結構な長さのあるもので、しかも日本独特の節回しが必要なものでやりがいがあった。テンションをあげて狂えという指揮者の先生のご指導にも応えるべく、かなりの気合いを要した。いや、気合いというか勇気という方が適切かも知れない(笑)聴きに来てくれた友人からは「ソロめちゃくちゃ楽しそうやったなぁ」という言葉をもらえて、あぁ……わたしはちゃんと狂えたんだなと胸を撫で下ろした。

しかし、先ほど「2年目の油断」と記したように、もう少し気を引き締めるべき部分もあったのではないかという反省もある。一番大きなものは日々の練習を最大限に楽しめなかったという点。週二回ある練習は、平日の夜練習は翌日の授業の準備のためにかなりの回数を早退したり、土曜日の練習は遅刻が多かったりバイトのために早退したり、と「楽しむ」余裕が去年と比べてなかったなぁ、と思う。物理的にも精神的にも。ソロがあるという責任感をもっと持つべきだったとも思うし、先輩としての態度を後輩のみんなに示さなければいけなかった、と悔やんでいる。自分が何をするべきか、周りが自分に何を求めているのかはその時々でちゃんと認識できていたはずなのに、いろいろなものとの葛藤で出来なかったことが本当に惜しい。合唱だけをしているわけでもなく、合唱だけを出来るわけでもない自分の毎日がもどかしく思えたこの半年だった。

クラブ活動に費やす時間は半端なく長い。でもそのせいで何かが出来ないというような大人気ない言い訳はしたくない。わたしはその意思を叶えられる人間になれるだろうか。

ジョイントコンサートと同時期にわたしは二十歳になった。二十歳になれた。誕生日を迎えるのが遠い話だった頃は、ふざけて早く二十歳になってお酒が飲みたいだなんてことを言っていたけれど、いざその日を迎えてみると、心の奥にずっしりとしたものが突然据えられた気分になった。それがこれからわたしが抱えていくものなのだと感じた。

誕生日を翌日に控えた日の夜に、浮かんだ言葉を詩にしてみた。気持ちは高ぶるばかりで、25分ほどでわたしの人生の中で一番長い詩を完成させた。駄文ではあるけれど、少し抜粋して記させていただきたいと思う。

「記していくことは 楽しみ／今日の笑顔 これからの夢／芯の折れる音 聴こえないほど／喧騒の真ん中で進ませた話／ページはなくならない／宿題は終わらない（中略）／抱きしめてきたんだ／何もかもを／たとえ薄れてしまったとしても／触れられなくなっても 見えなくなっても／（中略）／もうすぐ／何が変わるのだろう／霞んでしまうのかな／わたしの中の輝きさえ／（中略）／だから／今このときに祈りを捧げよう／何万回のありがとうですら／埋められない穴のために／もうこれ以上記せないくらいに／今 思い出を語ろう／わたしがわたしのまま 変わるために」

二十歳の誕生日を迎える瞬間に、最初に浮かんだ言葉はやはり「ありがとう」だった。今までわたしをここまで育ててくれた父と母、切磋琢磨しあった姉、叱って褒めて愛してくださった学校の先生、いつも心の拠り所になってくれた友達……。二十年という長い時間をここで過ごせてきたのは本当に奇跡だ。その奇跡を現実のものにしてくれた全ての人たちに感謝の気持ちでいっぱいだ。

だから、わたしはその気持ちを絶対に忘れずにこれから歩んでいかんとあかんのよ。みんなに恥じない生き方をしないとあかんのよ。

こんなに感慨深い誕生日は初めてだった。夏休みにもらう以上の宿題を、わたしは抱えて、いざ。